



日本キリスト教団
三軒茶屋教会

三軒茶屋 教会通り

第7号 2000年3月発行

〒154-0024
東京都世田谷区三軒茶屋1-31-5
TEL/FAX: (03) 3418-4933
編集/発行: 広報部

信仰表現としての讃美



牧師 陣内厚生

もう二十五年も前のこと、米国ジョージア州アトランタの下町にあるエベネーザ教会の日曜礼拝に、私は出席しました。ここはかつてM・L・キング牧師が少年時代を送り、また、彼がアラバマ州モンツゴメリーの教会の任務から転じて、後年、牧会にあたった教会です。彼が公民権運動の矢面に立ち暗殺されてから、すでに七年が経っていました。しかし、教会側の警戒は厳しく、私のようなよそ者はボディチェックを受けねばなりませんでしたが、なんとか会衆の一員に加えてもらえたのです。

歌い続けるという具合。印象深かった曲は「アメイジング・グレイス」でした。礼拝堂のあちらこちらから、まるで自然発生的に掛け合いの独唱と合唱が続くのです。自分が礼拝していることを忘れてしまう程、聞きほれてしまいました。そんなわけで、全体は二時間半ぐらいかかりましたが、私の生涯にとって忘れがたい礼拝体験となりました。

礼拝は、黒人教会独特のソウルフル（魂のこもった）な雰囲気にあふれていました。当然、キング牧師を記念する脚色がそここに施されていて、出席者は大いに励まされるわけです。期待どおり聖歌隊員もすばらしいのですが、圧巻は会衆の歌う讃美歌です。皆が体を揺らし、本当に魂を注いで歌っているのです。やっと一曲終わったかと思うと、だれからかまた繰り返し歌い始めます。するとそれに応じて、また皆が延々と

を讃美しなければなりません。そして、歌う人の信仰告白が伴うことにもなります。歌の上手下手が問題ではなく、「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして」神への愛を讃美歌に託すべきであります。さらに言えば、讃美歌は神への祈りの意味をもっています。真剣にとは言っても、歌うからには楽しい歌唱をめざすべきでしょう。

ここでは讃美歌の長い沿革と形成の過程に触れる紙面をもちません。しかし、一言すれば、聖書全体は神への讃美と崇敬に満ちていると言えるでしょう。そこに自ずと讃歌が生まれてきました。古くはモーセの時代、そしてダビデの時代、旋律を生み出し、楽器をかき鳴らし、礼拝の中で讃美は重要な要素となったのです。この意味は現代でも変わりません。今日、信仰から生まれた優れた音楽や讃美歌が、多くの作者らによって残されてきたのは、実に有り難いことです。この遺産を、私たちは礼拝の中で最大限に讃美表現し、神への応答としたいものです。